

アーダルベルト・シュティフター研究—「水晶」に見る思想—

石井翔太（ドイツ語学・ドイツ文学）

本論文では、オーストリアの作家アーダルベルト・シュティフター（1805-1868）の作品「水晶」(*Bergkristall*) について、この作品が収められている短編集『石さまさま』(*Bunte Steine*) の「序文」(*Vorrede*) で述べられる内容と関連させながら、作品に込められた作者の思想について考察をおこなった。「水晶」は、これまで多くのドイツ文学研究者によって、様々な観点から論じられてきたが、本論文では、それら先行研究をもとに、特に作品の登場人物の精神的な内面の変化と作品を通して伝えられる宗教性に焦点をあて、「序文」で述べられる「穏やかな法則」についての内容と照らし合わせながら作品の分析をおこなった。

「水晶」には、物語の舞台であるグシャイトという没落した村が、穏やかな法則の中で、向上していく変化の様子が描かれている。物語では、クリスマスイブの夜に雪山で遭難してしまう幼い兄妹のコンラートとザンナが翌日に無事救助される事件が中心となって描かれる。グシャイトとミルスドルフという二つの村の住民を巻き込んだこの事件は、グシャイトというひとつの村の中だけではなく、村という垣根を越えて人々を結びつける。下山途中、教会の鐘の音を聞いた救助隊一行は、兄妹の無事を神に感謝するかのよう、山に跪き祈る。

「序文」の中で言及される穏やかな法則とは、人間の心についての法則である。この法則は、人間の心を支え、人類をより良い存在へと導くということが示唆されている。そしてこの法則が、「水晶」の作品の中で、主人公の兄妹を雪山からの生還へと導いたものであると解釈することができる。というのも、彼らが生還できた要因には、いずれもこの法則が作用している。この法則はまた、シュティフターの宗教観とも密接に関連している。「序文」の中では、この法則が人間に作用する際に触媒となるものの一つが宗教であると述べられており、作品の中で、それが具体的に描写される。例えば、作品冒頭の語りでクリスマスに関する複数のモチーフとして自然現象が描写されていたり、グシャイトでは村人がみな宗教を重んじていることが語られたりしている。

「水晶」の短編作品の中には、それが収められた作品集の「序文」で述べられる作者の思想が間接的な表現で反映されている。この作品で描かれるグシャイト村の人々の変化は、シュティフターが「序文」で示唆している理想的な世界そのものであり、その自身の思想を作品の中で自ら肯定し、穏やかな法則に従えば、混沌とした現実の世界にも平和な未来への希望を見出せるということが「水晶」を通して伝えられている。